



りんごのきのした農園 2025 / 2026年 ご案内

研修期間を含めて、今年で10回目のりんご作りの年を迎えました。これまで続けてこられたのは、多くの方の応援と支えがあってこそです。この場を借りて、心より御礼申し上げます。この節目に、これまでの歩みを簡単に振り返ってみました。

・**就農前**：国際協力の分野で農業や農村開発に関わる中で、国内の農業人材の少なさと日本の地方の衰退を実感し、自分自身が農業を实践すべく、農家になることを決心。ご縁のあった駒ヶ根市を就農地とし、代表的な地域資源であるりんごを経営の柱に据えることに。

・**研修期間**：尊敬できる師匠に恵まれ、農学部で学んだものの馴染みのなかった作物生理学の全般を習得。いざ実践すると、予想通り、営農活動をバランスよく行うには海外の実践例が非常に参考になることが分かり、また体力的にかなり厳しい仕事であることも身をもって実感。

・**就農直後**：「作って売る」のではなく「売るために作る」という視点の重要性を改めて認識。加工品やブランドづくりを進める中で、手を広げすぎるのは良くないと実感し、「選択と集中」が大切だと学びました。なお、時間が限られる中でも米の生産はどうしても取り組むべきだと考え、就農直後からこだわって続けてきています。

・**現時点**：農業生産だけでなく、農村活性化に向けた活動（委員や農協の役職、猟友会活動など）にも力を入れ始め、ますます忙しくなっています。農業や農村の衰退の背景には「農村の価値が過小評価されている」との認識から、多くの人に農村の現状を知ってもらうために、農業体験・ホームステイ受け入れや研修活動に力を注いでいます。一方で、経営規模はコロナ禍の中でも徐々に拡大し、パートや援農希望者の助けを得る機会が増えました。今年は特に、シナノレッドやシナノゴールドといった新しい品種が加わ

り生産規模が大幅に拡大しています。

前職のJICAで最も情熱を注いで取り組んでいた研修企画活動は、今でも変わらぬ関心を持って取り組んでいます。今後の展望としては、農業や農村での体験を求めて訪れる学生など外部の人材に、自分以外の地元住民との接点を増やすように工夫していきたいと考えています。

さて、毎年のお便りでも繰り返し述べているように、米生産が政治的課題となり、温暖化がますます厳しくなる中で、生産現場では耕作者（いわゆる



担い手）の不足がいよいよ顕著になってきました。これも現場で実感したことです。一度生産をやめた田畑を元に戻すには多大な時間と労力が必要です。生産基盤の縮小は、生産コストの上昇だけでなく、異常な物価高騰を招く可能性があることは昨年・今年の米騒動で明らかになりました。振り返ると、私は先人たちが残した農村の資産を現代の状況に合わせてアップデートし、保全し、次世代に引き継ぐ使命に駆り立てられているのだと思います。生産活動はその実践の場であり、生計を立てる手段でもあると位置付けています。支えてくださっている皆様には心から感謝するとともに、ぜひ当農園を含めた生産現場に足を運んでいただければと思います。

前職のつながりでご縁がある認定NPO法人ESAアジア教育支援の会へは例年どおり売上金の一部を寄付します。大人気のESAのカレースパイスを是非一度ご賞味ください。



ホームページへ



2025年 8月 りんごのきのした農園 木下 佳信・亜紀